

川柳雜誌

第八月號

大正十三年三月三日第三號
大正十四年八月一日發行
每月一回 每份二角
同 日 發 行

川柳雜誌 第二卷第八號



CH
18



（大正十四年八月一日發行）

目次

遲日莊主人（一）

麻生路郎(六)

蛭子省二(三)

蛭子省二、篠原春雨、川村花菱（五）

吉岡鳥平(二八)

二 柳 子記(八)

.....(10)

坂井久良岨選(三)

柳川州馬選(三)

岩崎柳路共選(三)

情死の台……かほみ居會(三)

.....(17)

三

會報……(三)
松郎生(三)

川村花菱(二四)

麻生路郎選(二)

川柳雑誌

第二卷 第八號



非凡であれ

遅日莊主人

古い句には古いくさみがあり、所謂新らしい句には新しがつてゐくさみがある。鼻もちならぬ点は同じである。深思すべきである。要するに我々は生活に即して眞實の句を作りさへすれば、それでよし。

眞實でさへあれば、味も素つ氣もない句であつても、平々凡々たる作であつてもいいいふ意味ではない。そこに詩としての韻律、形式、内容の豊かさがなければならぬ。

常に潑刺たる句でなければならぬ。非凡になけらねばならぬ。永久に光るもの、けだし非凡の外にはない。(七月十九日夜)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 神 同 同 同 同 螢 同 同 同 同
戸 池
同 同 琴 同 同 同 吐 同 同 同 同 一 同 同 同 同 逸 同 同 同 同
月 露 狂

粒々集

○ 蛭子省二

筋かひに張り板の柄ほめられる
トルコ芥子女等へ落つるにくしみ
改心の夏瘦せ耆替ねして座り
子煩惱蛇莓のそくばもなき
障子はり背廣のままで顔をのし
葡萄半分枯れ日曜笑ひがたし
パイプ趣味みんな刻べて無銘なり

○ 篠原春雨

養蠶が上つて戀のまゝならず
智恵熟だ位ひで治る長屋の子

粹きづくり金が自由になる娘
廉賣へ浅間しい程人が立ち
おもちや箱に月経球の空の罫
普請中主人も少し陽に焼ける
お晝の子野球の輪から探し出し

○ 川村花菱

取れまいと思ふ氣取る氣今日も行き
姉の通夜もう妹が姉のを着
さうこめてあるか女の絹脚絆
揃へたい氣持ち小さな箱につめ
自作「遊蕩兒助六」の上演を見て

支那桐へ全体無理な八幡黒
守勢の女ペタンコになり
かきくさくやうに答案あさましい



句作上の常套語 (二)

麻生路郎

(2) 上の句を「事」で切つた句

前號では『事』で止めた句に就て書いた。今度は上の句が『事』で切つてある場合の句を擧げて參考に供したい。上の句を『事』で切つた句は『事』で止めた句のやうにさう澤山はないやうである。たまたまあつてもいゝ句が少い。これは『事』で止めるよりも叙法の點で一段の難かしさがあるからであらう。

昔の句

いらぬ事なきしかるが主の禮
(評)主人に對して盆正月の贈物さか、或は旅から戻つた時の土産物さか時折の手土産さか、主人の慶事などに贈り物をするさ、そんな心配をせいでよいのにさ叱るやうに云ふのが主人の禮の言葉ださいふのである。昔の主従關係がよく表れてゐるではないか。

さむい事うちわづかひを餅屋する

(評)團扇さ云へば暑いころのもの、それに餅屋は寒いころでも商賣柄うちわを持つてゐるのでうつつかりうちわづかひをして、觀るものをして寒がらせたさいふ感じの句である。するさい觀察さ云はれば

ならぬ。

そんない、存じません鶴を折り

(評)初心な戀、昔の娘さ、ろがよく出てゐるではないか「握られた片手疊をむしつてゐる」の姉妹句さうむごく言はぬものださにじりより」さいふ男の態度などが眼に見ゆるやうである。

惜しい事いろを亭主にしてしまひ

(評)今まではすいたはれたの仲であつたものが、一緒になつてからはさうくいちやついても居られず昔の面白さが無くなつてしまつたので、思はずこの句さなつた譯である。それにしても連れ添ふまでの甘さ加減が思ひやられるではないか。

けさる事女房は神ンのごさくなり

(評)誰知るまいさ口を拭いて澄ましてゐる亭主へ「また吉原へ行つてさ隠したつて駄目ですよ」さ真正面から一本。いやはや亭主の顔色更になじさいふかたち。

さむい事ほうを切られた人が来る

(評)何れは色ごこの果てでありませう。よく感じの出た句である。

今の句

歸る事ばかり言つてゐる國の親
 さん、言つてこの人逃ける氣か
 いう、の事ききます隣から
 長い事です、下向く藥瓶
 損の行く事冗談にしてしまひ
 そんな事まで姑の好い機嫌
 鼻の低い事仲人も知つて居り
 出来る事なら相手の顔を見る
 生意氣な事柔道を一寸知り
 言つたこと仕たことやに成る日なり
 そんなことつまらないわ、許嫁

(3)「居」て止めた句

徹底郎 愚劣 一如軒 志貴南 琴月 娘々奴 久樂 松郎 眠聲 莢豆 元山

川柳の叙法として『居』で止めた句は非常に多い。殊に古川柳には澤山あるが、佳句に乏しいのが疵である。これは斷定的な叙法であるがために餘程ヒントが合はない限りは平凡な句に終つてしまふからであらう。

—— 昔の句 ——

物さしで足らぬ足らぬさうい居、
 (評) 光景躍如たるものがある。句意は説明するまでもなからう。

乳貰ひの茶のあることをおほへて居、
 評「乳貰ひの袖につつばる饅頭」さういふ句もある位で、乳貰ひの真情思ひやられ涙なくては、めめ句である。男でありながらさうした一小些事にさへ心をくばるさま哀れにも氣の毒ではないか「南無女房乳を呑ませに化けて來い」の句ある所以。

當分は嫁逃げ込むにかかつてゐ、
 評、今時の花嫁は知らぬこと昔の花嫁は「見しやそれさもわかぬ

間に嫁かくれ」さういふほごには、はにかみやでもあり、つまじやもあつたのである。

絲巻の向ふに亭主をきつて居、

(評) この句を讀むと私は、この時の分によく姉の向ふで踊らされたことを思ひ出すのである。若い亭主が、兩の手に絲のかせをかけてしきりになごらされている態が目に見ゆるやうである。巧な寫生句である。

母の名は親爺の腕にしなびて居、

(評) 長時日の出來事を想像せしめる句である。現今では、だんく入墨が滅つてしまつたけれども、江戸時代にはかなり盛んであつたさ見ね、三社祭の時町内の若者が二十何人共同して膏を並べ一疋のうわばみをほつたさうである。それとこれとは違ふが、老夫婦の若き日が偲ばれるではないか。

—— 今の句 ——

これだけの人であつたと思つて居、
 嫌はれてゐることは知らず喋つて居、
 兄弟のやうで言葉が違つて居、
 言ひ譯をしてゐる傍に子供が居、
 ありもせぬことを妾は言はれて居、
 切れる文義理まいふ字がにじんで居、
 子にきけばやつぱり守がつめつて居、
 内職の隣り尺八鳴らして居、
 のみに來た友に家賃をきかれて居、
 これだけを持つて歸れと言はれて居、
 川柳の神髓を説くことも必要であるが、形式すら知らない人々に、
 上は例句に倣つて句の形を拵へて見るがよい。(つづく)

二柳子 雅幽 柳骨 徹底郎 天魂 美の作 少女櫻 寸馬 路郎

本社七月例会

十八日夜
於端之坊

趣味の友は暑さの外に立ちます。端の坊の會は段々旺んになって私達をよろこばせてくれます。今夜も山口から神戸へ移られた若林吐露樓氏、漫畫家の吉岡鳥平氏、なまの顔が見えて盛會を極めました。出席者は左の諸氏です。(二柳子)
路郎、紋太、文錢、双柳、太閤、乾坤、ひろし、三笑、萬よし、欣遙子、秀哉、二葉亭、紋十、徳生、飯山、俊藏、龍堂、紫陽、正坊、眠聲、閑路、三巴、閑堂、きよし、一左、のぼる、青影子、佳鳴、春葉、凡平、しげる、悠々、一柳、蝶哉、吐露樓、山月、雅幽、漢花坊、鳥平、馬行、松郎、鷹步、麗翠、幸堂、文久、松雨、刀三と私

社長(兼題) 路郎 選

何處で何してるか社長二日來す 吐露樓
京都から社長のお供一人乗り 松郎
うなづいて社長はそつ電話口 一聲
紙屑が散らぬ社長の煽風機 蝶哉
寂しさは社長と俺と同年 鳥平
社長の悩み白髪が目立つて來 刀三
秀才を並べて社長よい機嫌 閑堂
ストライキ社長の肚はまだ癪 欣遙子
あれからの社長は會はぬ事に 凡平
不動産投げ出す迄社長決め のぼる
外電が、社長の肚を逆に来る 三巴
井目において社長はやつミ勝ち 眠聲

漸くに社長の判で焼がつき 芦穂
社長から見れば日本の狭い事 茨豆
資本家でないとは社長口の先 柳骨
お妾の兄を社長は持て餘し 新坊
挨拶に社長の辭を一つ知り 乾坤
倫敦で買ふたメタルを社長呉れ 萬よし
タイピスト社長の世話になつて 悠々
社長ならこつまらぬ職へ就き 紋太
新任の社長制度を少し變へ 輝翠
經驗は遂に社長の椅子をしめ 同
社長云へばすん／＼奥へ連れ しげる
ベル押せば社長の知。給仕が來 同
お歸りの社長をおくる女事務 秀哉

八

社長室給仕に讀める本がなし 同
社長室新聞の散る風があり 案山子
確答は社長が歸りましてから 同
要求を社長無理とは思はねえ 飯山
鼠にも引かれず社長歸る也 同
委員等に社長要領得せしめず 柳水
忙しい中に社長は劇も書き 同
社長をば中心にして俳句會 同
櫻筋社長やつぱりお目出度し 竹馬
社長室帶地にのしを付けさせる 同
(軸) 上京の社長に二號行て待ち 路郎
初戀(席題) 互 選
初戀のその成行きを女給知り 紋太
徴兵検査に初戀の年なりき 同
初戀の襟つ、ましく搔き合せ 同
初戀を胸に包んで奉公に出 悠々
初戀の河をはさんで淋しがり 同
初戀の二人なんほうでも歩き 同
初戀は唯逢ひたさの間に立ち 飯山
約束云ふを初戀守り合ひ 同
初戀の窓から何か捨てゝる 刀三
初戀に動物園は久し振り 同

卒業も近く女が眼にうつり 凡平
 初戀へ學期試験が近うなり 同
 ちらみ見た丈で初戀安心し 吐露樓
 又事によせて初戀出て歩き 同
 初戀が繪端書になる映畫劇 きよし
 初戀の二人へだけの舞臺なり しける
 初戀の肩が觸れ合ふ馬車が搖れ 蝶哉
 初戀は日記を埋めて埋め足らず ひろし
 初戀の話を明す客が出来 同
 初戀に姉だけ力入れて呉れ 蚊十
 初戀は親を要らないやうに云ひ 同
 初戀のたゞ傭いてついで行き 眠聲
 ごう云へば判るか初戀の味 松雨
 初店の初戀らしく氣に入らせ 山月
 初戀の俺に淋しい母一人 三笑
 初戀の二人西瓜を割つてたべ 二葉亭
 初戀は父をわけなく怖く見る 龍堂
 初戀は記憶に残るだけのこゝ 聞路
 初戀のまだ肩あけも下されず 一柳
 讀本を手にもう戀を知り染める 佳鳴
 初戀を打明けぬ内嫁がれる 紫陽
 あこさきもなく初戀は駄々をこ 泗水

初戀の男を年増辛氣がり 魚交
 初戀のほんまに信じ切つてゐる 双柳
 初戀はさもに出雲のくじに洩れ 欣遙子
 初戀は日傘をさした其姿 青影子
 初戀のやせる所へ迄行かずのほろ 同
 初戀のやせる所へ迄行かずのほろ 同
 もう一人伯父に初戀容れられず 一左
 初戀は當つて見ろと勵まされ 正坊
 初戀を割かれて息子身を崩し 同
 初戀をしてきた話露骨なり 文錢
 初戀は獨り放れて泣くばかり 万よし
 母へだけ云ふたは遙か後の事 同
 初戀も知るや知らずに母となり 乾坤
 初戀に添はしたい氣の母親 同
 初戀の味カルピスまた違ひ 鳥平
 初戀の味聞いて初戀諦める 同
 相性を聞いて初戀諦める 同
 初戀へ親爺儲けるばかりなり 松郎
 初戀も知らず廓に雇はれる 同
 あ的女一人のやうに思ひつめ 路郎
 初戀のそばん又もおき直し 同
 樹蔭(席題) 紋太 選
 珍客に樹蔭藤椅子心太 路郎
 樹蔭から金持の家根はすに見る 松郎

樹蔭から道行く人を暑う見る 吐露樓
 頃合。樹蔭へ香具師の眼が届き 馬行
 チンコロを運ぶ樹蔭に落付けず しける
 樹蔭から忙しくて人の裾を見る 凡平
 手傳ふて樹蔭へまわす涼み台 幸堂
 樹蔭に寄つて四五人不平なり 雅幽
 うつかりこ來る樹蔭に人が居り 欣遙子
 募集してゐるを樹蔭で聞て来る 眠聲
 馬おいて同じ樹蔭に汗を拭き 太閤
 かくれてるや、樹蔭に待つ居る のほろ
 丁稚ふさ本讀む樹蔭見つけたり 二葉亭
 此樹蔭毛虫の落ちる事を知り 青影子
 撒水車樹蔭の人を迷はせる 同
 炎太三樹蔭にあつて繪にされる 溪花坊
 レンズからまだらに見る樹蔭、 同
 (軸)行くあてもなく樹蔭に残り 紋太
 小男 (角力吟より)
 小男で通つて金を貯めてゐる 松郎
 小男の意地演壇に立ち上り 双柳
 小男の亭主不平もなく動き 乾坤
 何事か云ふて小男後になり 一左
 傾ける日に小男の影長う延び 青影子

ぎつかりミ小男坐つたつもり、吐露樓
 小男の若く見られて寂しがり、鳥平
 小男にシャツ裂けさうな力あり、二葉亭
 伸びる丈伸びて小男あきらめる、幸堂
 小男は障子の影も人に負け、三巴
 嬉見せて呉れミ小男からかはれ、馬行
 奈良丸をやれミ小男ひき出され、紋太

第十三支部句會

前號で發表した住吉菖蒲園句會の未發表稿(幹事)

鑑 醫 者 互 選

もててゐる様に鑑醫者賑ミ、刀三
 鑑醫者のチト仰山な樂なり、双柳
 大けさと言ふて鑑醫者金をこり、秋葉
 鑑醫者の息子も、醫者になり、樂居
 看板で醫者こいふこだけ分り、萬よし
 あれで醫者か片腹痛いなり、松雨
 聽診器患者に見せる爲めに持ち、風
 風邪一つ引かず鑑醫者立廻はり、松郎
 鑑醫者は決して鑑ミは思ふてず、信かず
 藥局の窓文け鑑醫造り替へ、助六

床上げの祝鑑醫者踊らされ、かほろ
 履物を鑑醫自分の手で揃へ、同
 鑑醫者ミ鑑醫者博士呼ぶこきめ、二天
 鑑醫者にして死ミ子の年を繰り、同
 鑑醫者ミ居るミは子から聞き、路郎
 まだ注射する氣で鑑醫上ッ來、同

蛙 互 選

引越した晩の蛙を嬉しがり、刀三
 大掃餘蛙又もや追ひ出され、一路
 暮ごつくりこしてこけが、多間
 自轉車の一人は降りる、蛙 二天
 古池へ蛙ミさりの様に飛び、かほろ
 蛙今日仲間が殖わたなミ思ひ、同
 蛙等が申合せて蛙を飛び、樂居
 蛙默す人間様の御通り、同
 土砂降り、互 選
 土砂降りのミ出雲屋へ流れ込み、多間
 デパートの奥様土砂降り知、信かず
 土砂降りの中を軍歌で町へ入り、萬よし
 土砂降りの渡舟に知つた人が、松郎
 土砂ぶりに船頭こけるだけは、美の作
 土砂ぶりに又一本をつけさせる、双柳

土砂ぶりに電氣が欲ミ戸を閉る、二天
 土砂ぶりの跡は涼しい風になり、一路
 土砂ぶりに又庭下駄が浮ミ居る、秋葉
 土砂降りに黒塗の下駄はかざ、かほろ
 土砂降に女うつかりつきこほし、同
 はねてミ外の土砂降りヤット知、樂居
 土砂降りの町ミ見ミるビルデング、同
 土砂降りの船を橋下まで、急ぎ、松雨
 土砂降に昨日洗つた浴衣なり、同
 土砂降りに處女の姿で濡ミ來る、刀三
 土砂降りに男盛りの脛を見せ、同
 土砂降、市電豫定のこミへ着き、同
 土砂降りにしたたか濡ミ迎ミ來、同

三允歡迎川柳會

三越で俳通路展覽會を開催された俳人中
 野三允氏は又川柳研究家として知られて
 います。同氏の御來阪を機とし七月十二日
 夜道頓堀川堀船「かき彌」で歡迎川柳會を
 開きました。土砂降りのあさの澄切つた空
 をながめながら句三昧に耽りました。作句
 後同氏の有益な川柳講演がありました當

夜は藤原遊二郎氏(俳人游魚)なごが久振りに顔出しなされました。出席者は左の通りです。(幹事)

三九路郎、遊二郎、蚊象、文銭、煙霞坊、蚊十、眠聲、乾坤、舞翠、凡郎、多聞、義一、閑路柳蛙、正坊、柳水、一左、文久、二葉亭、かほる凡平、しげる、悠々、青影子、ひろし、萬よし宗一、のぼる、山月、飯山、刀三、松雨、光太樓、英豆、馬行、松郎、太閤、双柳、二柳子

歓迎(兼題) 路郎選

歓迎の委員は柵をひよいこ越へ 蚊象
歓迎は恩師の老けた顔を見る 飯山
萬歳の聲に宮様笑ませられ 正坊
歓迎に亭主ふだんのまゝで行き 蚊十
手踊もあつて歓迎無事に 濟み 一左
歓迎に生徒萬歳言ふだけ 閑路
歓迎の一人目敏く見つけたり 悠々
歓迎を覗くこともなく出前持 松郎
歓迎を受けて岸壁黒う見る のほろ
笑ふて呈し笑ふて受ける花輪 義治
見知。い人の氣焔が御意に召し 煙霞坊
成巧もせず歓迎に恐れ入り 双柳

當然の様な歓迎受けてゐる 刀三
歓迎を豫期したやうに着陸し 萬よし
歓迎の上座はんのりまわつて居 しげる
歓迎をされて言ひ出し得ず戻り 光太樓
歓迎に大阪驛がすゝけ過ぎ 柳水
初めから飲む氣ばかりで歓迎し 太閤
歓迎 會御意にかなつた安來節 眠聲
歓迎の俵を新地まで飛ばし 凡平
歓迎へ沿道だけの旗を立て 同
まだ驛へ着かぬに花火二ツ聞き 馬行
歓迎をされて碌様町も見ず 同
お迎ひに來たミ蝗が飛びかゝり 遊二郎
歓迎の船がチャブ／＼いふて。 同

人

灯の揺れるやうに迎へ今日の客 英豆
地
あくる日の緑門氣拔の様に立ち 義治

天

嬉しいが世間の手前出迎へず 遊二郎
水上署 互選

事故でないかき彌の笑ひ覗か。 三允
水上署新しい下駄拾ひ上げ 同

水上署メガホン使ふ事が出来 凡平
涼しけに見廻つてゐる水上署 柳蛙
水上署オールを休めて流すなり 蚊十
水上署橋の工事を見てるだけ のほろ
すぶ濡れの女泣いてる水上署 光太樓
かき船をけなるがつかく水上署 山月
この夜深け一度迄こゝで船を。 煙霞坊
泣いたばかり水上にミがめ。 英豆
水上署さうミは知らず通りぬけ 一左
水上へ替つて聲が太くなり 柳水
水上署むしろを二枚もつて行き 松雨
青い藻が水上署の目を休め かほる
水上署今日も警報出しただけ 眠聲
蒲潮にはつきり映る水上署 刀三
水上署切戸をあけて水を汲み 馬行
水上署安治川へ來てつなされる 二葉亭
巡回は涼みの氣味の水上署 文久
出帆の笛水上署留守のよう 同
水上署大分飲んでゐるを知り 悠々
水上署ビクの流れて行くをみる 同
警羅船蒸汽の波に岸を見る しげる
手あけてあつちへ行けミ水上署 同

川風に秋をおほへる水上署 飯山
 水上署から本船を高く見る 同
 水上のランチ事ありさうに見え 乾 坤
 水上署さして急かぬやうに漕ぎ 同
 堀割を大きく曲る水上署 松 郎
 干物の雫見上ける水上署 同
 水上署待つてたやうに救ひ上げ 路 郎
 活劇のやうにも見える水上署 同
 身の上 互 選
 其息子その身の上に恙なし 青影子
 身の上はたゞ氣の毒と思ふだけ 双 柳
 改心はしたが身の上前科者 太 閣
 身の上の話に母は一思案 山 月
 身の上を聞けば可愛い氣いもな 松 雨
 身の上を思ふに嫌に成つて来る のほろ
 身の上は只松風に吹かれてる 文 錢
 身の上を療阿で聞かす凄じ事 萬よし
 炭團灰なるに身の上とつきず 多 聞
 うつむいたまゝで身の上申上げ 光太樓
 身の上を知つて長男身を崩し 柳 水
 身の上は救世軍の服を着て 三 允

身の上に十二時がチンミ打始め 凡 郎
 合宿の身の上コタツてできなさ ひろし
 身の上話お召の裾が切れてある 遊二郎
 あり勝ちの身の上を聞く長火鉢 しける
 身の上は不言不語三昧を弾き 蚊 象
 お目見得の下女に身の上話あり 凡 平
 身の上を言ひ紅をさして見せ 煙霞坊
 身の上を聞く知らずも恐れてる 正 坊
 身の上を知られてゐるが弱身也 飯 山
 身の上を話し乍らにすしを巻き 二葉亭
 氣まゝものの身の上をさへ迄に 松 郎
 身の上に薄着の襟を合したり 文 久
 札 所 三 允 選
 彌陀の慈悲語る札所は靜かなり 悠々
 此札所この石段を見上げられ 青影子
 二三日泊つて見たい札所なり 飯 山
 蝙蝠が飛んで札所は暮れて行き 刀 三
 薦の葉の真赤なころの札所なり 多 聞
 久方に參る札所の雨もよし しける
 遠足にフト思ひ出す札所あり 一 左
 札所の茶店の婆も佛性 柳 蛙

足をやすめて奈良朝の夢 莢 豆
 親切にされて札所にくたびれる 松 郎
 昨年はこゝの札所で飯を喰ひ 蛟 十
 札所から札所に戀を泣いて行き 煙霞坊
 日の入りを拜み札所の門につき 双 柳
 見覺の笠に札所でまた出逢ひ 馬 行
 花山の院だけが札所の別にあり 文 錢
 ヤレ／＼と思ふ札所の急な阪 かほる
 山門の仁王を見入る札所なり 山 月
 はき替はわらじ札所の裏へ捨て 聞 路
 また此所の札所も高い山の上 輝 翠
 おついでに廻る札所は遠からず 同
 一つだけ残る札所へ草臥れる 乾 坤
 札所から札所へ聲が囁れて行き 同
 札所から又大阪のつれが出來 眠 聲
 札所またこゝもいもを賣り 同
 湖へ指差す札所黄昏れて 文 久
 札所から景色を褒めた道になり 同
 此坂のやつぱり札所らしいなり のほろ
 おいづるを今日で納る宿を立ち 同
 札所から極樂が見え鬼が見え 蚊 象

南無大師 札所は遠し道惡し 同

札所から歸つて年がぐつゝ老け 柳水

渡しから札所巡りゝ連れになり 同

蠟燭を上げた札所を振り返り 松雨

又こゝも札所おんなじ土産物 同

南國の札所札所に春の花 凡平

つかれてる後姿を見る札所 同

關東のお方に見受する札所 同

本當の心で札所拜んでる 萬し

札所からあんなところに一軒家 同

札所から暫く連れに女達 同

札所から少し離れて細い道 光太樓

登山服ドヤ／＼と札所へ來 同

札所までの路を落葉の掃かれた 同

國からの便りが來てる粉河寺 正坊

團體が札所へ着いたにぎやかさ 同

登山隊札所の印も貰うて來る 同

泉水があり金魚ゐる札所也 遊二郎

札所まで辛抱せよと子をなだめ 同

ひぐるまがごこうに見る札所也 同

信心は瓦一枚帳に付き
國寶を見し足羽のつれをまち

情死の句

かほる 居偶會

情死さきめて羽織を着せに立ち 光太樓

情死の袂に琴の爪があり 同

情死は柳へ一寸よりかゝり かほる

情死の女の足に血がにじみ 同

情死の二人一緒にけつまづき 同

情死さきめた心が汽車の隅 馬行

情死の吸はれたらしい景色 同

情死をするか云へばにじり 同

情死の話が切れて波がみね 刀三

情死の一二三云はぬなり 同

戸を叩く音に情死氣が變り 同

情死へ男優しく手を握り 同

情死の鞍替をする筈なりし 松郎

情死の書置二つ男文字 同

抱合ふて死ぬ氣に涼し過ぎる風 同

万よし川柳會報

第十三回 題 襷、ハガキ

本田 溪花坊選

(天) 黒襟に惡縁さいふ酌を受け 刀三

(地) 暫くは別れた儘の襟の色 長人

(人) 一ツづゝ襟片付も行く揮發 馬行

軸

出發の行李の横にくける襟 溪花坊

万よし川柳會報

第十四回 題 庖丁

岸本 水府選

(天) 庖丁を一分にじらす目分量 晩醉

(地) 庖丁が腰にゆれてる荷造場 松郎

(人) 庖丁を擦す聲から黄昏れる だけを

五 客

庖丁が反つて飯事終ひなり 晩醉

庖丁を見てゐる何か口へ入れ 柳太

組へ庖丁砥石から戻り 同

庖丁を持つとこめかみ動く癖 松郎

二日酔して庖丁の見ゆる部屋 刀三



表現と言葉

川村花菱

全國川柳名句番附の事

一三年前の事、私の脚本が映畫になつた時、私には全く無斷で『嵐する前』と云ふ題がつけられた。由來映畫の題には、いかゞはしい辭句が多が人事ならず自分の作品に慙した文句をなさない題がつけられたのをさう位不快に感じたか分らない。しばらくして、當時その會社の宣傳部に居たMと云ふ男に、いかに何でもあんまりイヤな題だと言ふ。

新しい言葉を作つたと思へばいいやありませんか
と酒蛙々々として居た。名づけるものも、會社のものも共にそんな態度なので私はもう呆れ果て、何にも云はなかつた。丁度去年の八月、訴訟の事で仙臺に行つたかへり、私の親友で私の代理人であるMと云ふの二人、松島見物に行つて、五十三

年間火事と云ふものが無いと云ふ鹽釜の細い町を通る、小さいバラック建の活動小屋に雨じみのついた赤い旗が立つて居て川村花菱原作、細山喜代松監督大悲劇『嵐する前』六巻と染めぬいてあつた。

Mさん、これは僕の作品ですよ

と云ふM、思ひもかけず、東京をはなれて遠く、慙うした事實を前にしたのを、商賣らがひのMは意味あけに考へたらしく、しばらくその小屋の前に立つて居た。

さうして、その新熟語が、その會社との契約のある館のある處、恐らく日本國中の津々浦々まで恥をさらして歩くのだと思ふ、私も、寝不足の上に炎熱の町を歩いた故か、妙にいらだき

しい氣持になつて來た。

大衆ならびに散文的な人々に特殊な印象を與へアトラクションを持つ云ふ目的に向つて使はれる言葉は、廣告宣傳の用であつて、云ふものゝ心から聞くものゝ心へミヒツクものではないから、怎でもいゝやうなものであるが、それでさへ、原作者のつけた題には必ずそれ丈の理由に深い意味があるべし。徒らに他のものがそれを改題すべきものではない。まして、それが單に人目を惹く云ふ丈の意味に於て、原作の内容にふさはしい色彩と味を持つたものを心なく改めるに於ては許すべからざるものがある。

殊に私は自分の表さうとする言葉に人一倍の注意と考察を重ねるので、慙した事實はたまらなくなるのであるが、これにもまして不快な事は川柳家と稱する人々の間に使はれる全くあやまつた言葉に出會ふ事である。云ふまでもなく、川柳一句は作者の胸からこれを見るものゝ胸へ傳はる詩である。原作者の心の表現である。その表現には、只一つの言葉より他にない筈である。それが單に川柳を作る爲に、言葉ならざる言葉の數々が恥かしけもなく用ゐられ、而も相當名ある選者も平氣でこれを高點に選ぶに至つては川柳の向上もまだ／＼の事と思はれて、さびしいやうな感じがする。

この例を、たま／＼第四回全國川柳名句番附に發見した。

言ひ勝つた方もろく／＼寝つかれず
言ひ勝つた方も淋しく雨を聞き
吃驚しては居眠りまゝ眠り
獅子舞ひは手近な顔の不意を打ち

以上四句いづれも高點の句であるが、吾々東京人の間には、『云ひまける』『云ひまかす』『云ふ言葉はあるが』『言ひ勝つ』『云ふ表現は無いやうだ。又』『吃驚する』『吃驚させる』などは云ふが『吃驚する』など云ふ事は斷じてない。これは單に東京語許りでなく、日本語でないやうだ。又これに反して『不意打ち』『云ふ言葉はあるが』『不意を打ち』『動詞として使はれる表現は知らない。さう嚴重に論じてはまるで文法の試験だ』『云ふかも知れないが、言葉があつて、然る後に文法があるので、それはでたための新造語や違法の言辭を取りしまつて正しい心の表現を保護しやうとするに外ならない。私は決して新造語を否定するものではないが、

言ひ負かした方もろく／＼寝つかれず
言ひまかした方もさびしく雨を聞き
では上五がうまく坐らないので、逆に『云ひ勝つ』『云ひ吃驚しては居眠り又眠り

では、上五にならないので、句の調子をミのへる爲に『びつくり』『なご』出鱈目を云つたので、『不意を打ち』『ミその顔

である。五、七、五の調子を重んじ、その僅かの文字の中に大
きい人生をも云ひ含めやうとする川柳にあつて、人間の言葉を
でたらめに改めなほす事はつゝしむべき事である。それ詩とは
自然人生を言葉に由つて再現する心の聲である。理智的批判な
らびに推測に由つて首肯され、以て足れりとするやうな生命な
き文書と同列のものでない。

一羽の鶏が片足あけて、首をかしげ、しきりに胸の邊りを
かきむしるやうな風にして居る——

これは、文字の羅列ではあるが、詩ではない

鶏の何か云ひたい足づかひ

これは川柳である。

みんなで遊びに來た時には別に氣にも止めなかつたが、ある

氷原句集に對する希望

小樽の川柳氷原社から氷原句集が出る
ことを、氷原第十五號を見て知つた革新
川柳史の第一頁を飾るべき企てとして大
いに喜ばしいことである。が、しかし其
の豫定なるものを見るに氷原十五冊中か
ら約千五百句を抜くとしてあるが、一冊
から平均百句以上抜くことは多きに過ぎ

はしないか私としては、先づ三百かせい
ふ、五百句位にして、しんみりした味はは
して貰ひたいと思ふ。そして情實を排し
て眞に價值ある句のみにしてほしい。私
がこの苦言を呈するのは販賣政策のことも
なほぬこと、社會一般に對する價值宣

時、旅行で品川に泊つたらば、海岸の故か波の音がきこれた
では只の文章であるが、

品川も旅で泊れば浪の音

と云へば川柳である。本當に物を見、本當に云ひあらはされ
た所に永遠の生命がある。技巧を離れて藝術は無いミロダンも
云つて居る。同様に技巧をはなれて眞の表現はない。繰返して
云へば、表現とは只一つの言葉の發見であらねばならないので
ある。

最後に尾山夜半杖氏の全國川柳句番附はいつも大變な
努力だと思つて居る。回を重ねるにつれて、段々凡てがミ
、のつて來るのはうれしいが、同時にその句も揃つて來る事
がのぞましい事である。

(七月十日)

明の第一使であることを思ふからである
目下「小康」が影を潜めてゐる際革新派急
先鋒の氷原社の意氣を壯にすると共に、こ
の舉の有意義に終らんことを切望してや
まない。(路郎生)

豫定体裁。四六版約二百頁、内容各作家別
(イロハ順)句數約壹千五百句、賣價壹圓參拾
錢、期限大正十四年八月中、豫約申込所

小樽市稻穂町東一ノ七川柳氷原社

る募を字め埋

◇ いさ下てし募應にん盛 ◇

作句練習のために埋の字を募集することにしました。

許嫁 ○○○○○○ 計り也

つまる所 ○○○○○○ 櫻咲く

右の二句は古句です。○○○○○○○のころへ七音の文字を挿入して出来るだけ佳句にしてください。

古句を全く同じになつたからして必ずしも嬉しいことではありませんが、古句を寸分たがはぬ句となることもあるだらうと思ひます。

多少違つた文字が這入つても句意に於ては殆ど違はぬやうになることもあるでせう。

かと思ふに、一字や二字の相違から句意が全然違つてしまふ場合もあるでせう。

兎に角中七音の變化が、されば違つたものになるか興味の深いところだと思ひます。これは出来るだけ澤山な人に應募して頂きたいと思ひます。

幾分作句上の参考にもならうかと思ひますので、の結果を統計的に分類し、次號で發表したいと思ひます。

二句とも出来なければ、どちらか一句だけでも構ひません。

締切は八月十二日です。締切日は嚴重に守つて下さい。

編輯日までに、ちゃんど原稿にしてしまひたいと思ひますから。

講漫

夏祭二題

吉岡鳥平

(一) 假裝會以上

大阪の七月はお祭りの月だ。春祭も秋祭も無く、七月中に一齊にバタ〜ミ大掃除の



たいに、お祭をやつて仕舞ふから痛快だ。

××神社の

日、無情に

も朝からの

土砂降だ

行列の連中

無困らだら

うと思つた

ら、神主始

め使丁に到

る迄、文明

の利器を着用に及んで済まして居た。かゝる姿は一體、如何なる時代の如何なる階級の風俗なのか考古學者よ、御示教をお願ひ申す。

川柳書架(十二)

古川柳評釋(情本位)

(中野三九著)

▲巻頭に坂井久良岐氏の『情本位の序』があり、次に著者の『狼か良犬一』いふ自序がある。左に自序を轉載する。

川柳に解釋を附けるのは、野暮な沙汰だこの説がある。一應御尤もに相違ない。

獨りの川柳に限らず、苟くも藝術なるものは熱もあれば血も通ふ一箇の生物である。其生物をメツタヤタラに姐に上せて、解剖したところで、胃の腑や心臓の在り所は分るにしても、爲めに却つて生命を損するの嫌ひがあるからだ。多くの場合ツミ云へばカで受けるので味の

ある川柳に於て特に然りである。此弊は川柳をよむこの出来ぬ者が川柳を解釋する際に、著しきを感じられるのである。

然るにこゝに天保年中、岡本忠次郎まで後に近江守となつた人物が、或る地の代

(二) 文化巫子

△△神社に参詣したら、神樂殿は巫子が三人も居し仲々、さうしてさうして、玉揃
わさ来て居るので前は押すな押すなの人ばかりだ。巫子つてものは下け髪にきまつた



ク、大太阪だけのことはあるミ感嘆これ時を久しうした。來年は耳隠しや鬘髪の巫子
なまが出るに違ひないと思ふミ、あゝ來年が待遠しい。

ものと思つ
たら、拳闘
用の手袋み
たいなオー
ルバツクミ
か云ふ髪ミ
七三ミ釜
敷みたいな
大ハイカラ
髪だから、
いよう、流
石は日本の
ニユーヨル

官として赴いたとき、邑を狼が荒すミ
いふのを聞し、「毛屬蕃生國土恩、住山
何得害山民」「看狼字」是良犬、識汝
自今知愛人」こいふ詩を作つたので、
狼害が止むだこいふことである。彼の「
おのが名の傍を食ふ狐かな」こいふ俳
句で、狐の瓜を盗むを止めた話に似て居
るが「看狼字」是良犬は惡獸狼を解釋
して良犬たらしめたので、此用意を忘れ
さへせねば、川柳の解釋も強ち野暮なり
として排斥する譯に行かぬのみか却つて
之を獎勵して可なりだ、要は狼が良犬
か問題になつて来る。
扱て然らば本書が狼であるか、良犬
であるか問はれた場合、著者としては
却て本書が狼であるか良犬であるか、
忌憚なき批評を讀者の方から得ないので
敢し自ら良犬であるか名乗る程の面皮を
持合せないのを殊勝なりとして頂きたい
(大正十三年十月三十一日小石川關口町
なら俳庵庵樓上、天長の佳節を祝しつゝ、

募

集

句

三味線屋

坂井久良岐選

三味線屋供養する氣で猫を飼ひ 一方
ハモニカモ飾る場末の三味線屋 突支坊
三味線屋よひける手付きなり 憲翠
酔ふて来いでもこいの三味線屋 南天棒
三味線屋水平社へ顔が賣れ 柳村
お隣りの猫を寝めてる三味線屋 炭車
仕事場へ藝者が上る三味線屋 清春
何もかも弾けさ云ふ三味線屋 聞路
三味線屋立膝をして調子を見 普天
三味線屋自慢の音締弾ひて見せ 辰進子
獨酌の隣りはいきな三味線屋 小路
ウインドの三味線屋も光居 露斗
三味線屋息子バイオリンを弾 琴月
三味線屋恩案の内に十二月 木屑
三味線屋有りし昔を語つて 笑郎

張替に牙音を出す三味線屋 幸次郎
三味線屋今日も同じ歌を弾き 俊翠
三味線屋奥で娘の三下り 眠聲
三味線屋溫書會に招かれる 案山子
三味線屋譜こいふも賣居り 三巴
見なれない子だと思ふ三味線屋 光郎
三味線屋の陳列見てるいゝ女 仁川
三味線屋妾の宅で小半日 同
門口に亭主待たして三味線屋 元山
糸の愚痴又聞かされる三味線屋 同
張替に一バチ當て三味線屋 すずき
好い旦那三味線屋迄連れ出され 同
三味線屋弾けば唄へる喉を持ち 吐露樓
三味線屋お客の様な装で来る 同
三味線屋店一つばいに響がせる 凡平

執筆中野三九

▲大正十四年六月三日發行。二二七頁。

定價一圓五十錢。東京市神田區北神保町

十三番地山海堂出版部。

▲巻末に古句による索引が附してあるから

さんな句が評釋してあるかを知るに便

利である。

▲多少狂句を混入してあるが古句さうま

れた時代の風俗や人情を知る上に參考に

なる。

川柳家の戸籍調べ

係馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所

(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)

好きなタイプ(九)自信の句(一〇)川

柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)

嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(20) 坂井久良岐

(一)阪井辨(ワカチ)(二)久良岐(三)石坂

徒然坊、錦粧軒、堅魚洞、七段老人、富

十見の里人、寸心千古堂(四)東京市駒町

區九段富士見町六の十裏(五)明治二年正

月廿四日生(六)地主(七)柳橋切つて放せ

三味線屋後姿に見されて居同
 五六丁ならべ三味線屋の暮し同
 著音器かけて三味線屋の休み柳人
 三味線屋、別なのを弾いてみせ同
 三味線屋去年の分が今年賣れ同
 三味線屋太夫の癖をよく覺ゆ万よし
 丁稚も、高い山弾く三味線屋同
 三味線屋御差紙は駒の用同
 三味線屋だけではないと立聞し山月
 名古屋ではこうで、三味線屋同
 置き屋から電話の掛る三味線屋同

鰯

鰯の型にはまつた目刺なり柳村
 大漁に聲ばかりの闇の濱清春
 鰯賣り値切ると沖が時化てます炭車
 父と子と母との晝に干鰯元山
 競走の様に鰯賣り瀬戸貝屋仁川
 不取煎鰯をやいて晝にする露斗
 炊事場へ斥候鰯を見て戻り山月
 鰯店見本のやうに賣残り木屑

お座敷で客に貸したと直しもの同
 (人)三味線屋矢張り三糸切れ光朗
 (地)三味線屋琴見と下駄履三巴
 (地)奉祝に召喚された三味線屋山月
 (天)三味線屋佐吉の額も陳列し万よし
 (評)

「三味線屋人がたかると彈崩し」の古川柳以來別に變化なき商賣故、題材の内容が極めて單純すぎるため、特に佳吟の乏しかりしを已むを得ぬ結果であらうか。

(軸)

三味線屋袴を着ける時もあり久良岐

柳川 洲馬選

冗談に鰯の頭拜んぎき柳人
 廣い海に鰯は狭く生き愚劣
 賣聲の生と違つた鰯の目夢坊
 仕事場へ今日も鰯告げられる三巴
 鰯賣り今來た後へ鰯賣り山美
 鰯の小骨にお祖母さん眼鏡吐露樓
 喜んで鰯を食べる暮し向き凡平
 箱詰の鰯曲つたまゝでもり聞路

は矢の如し、クワイのクワイミト野
 さして飛び、杜若蛙は聲を呂に落し等
 (八)森津子精神の後援者(九)天照す道は
 一萬三千里、おりに心の江戸をしつかり
 と持つてゐやう、一日でも愚痴のない世
 界に住みたい、伊勢武者は緋威を着て唄
 ひ出し、獨逸から目立に來たは素晴しい
 丸之内蘭丸以後の名が高し、橋一つ有つ
 て千住は江戸の儘、杜若江戸の燕が濡れ
 て來る(一〇)河東節、尺八、書、畫、聲
 色、釣、寫眞、素劇珍派劇の關山、美術記
 者の元祖、角力記者の中興、風船を矢鱈
 に飛ばす事まだ澤山あり(一一)阪井素梅
 女、歌人故佐々木弘瀨門人(一二)勝負事
 暴力、談判、小理屈、キザ(一三)明治十
 七年秋伊賀名張藤堂男爵邸にて繪本柳多
 留を見て深く興味を川柳に感じ尙平田篤
 胤講本を読み引用の川柳に興を深くす、
 當時「團々珍聞」狂句欄に投句し九世川柳
 の選に入る一句あり「頭に蜻蛉秋津洲を
 代表し」後明治廿四五年頃「日本」へ川
 柳を時々寄附せり「師の君が春の君にな
 るさつてい事」「女湯は智情感共揃つてゐ」
 等人口に膾炙す。

小鰯に出及ばうてふの大き過ぎ 同
 (佳)鰯賣り昨日の路次へ又は 憲 翠
 (佳)只潮のまに／＼鰯生ひ育ち 萬よし
 (人)腹かけの金で鰯を買へ来る 吐露樓

駈 落

◇ 二 柳 子 選

費ひ切る頃に駈落 戻つて來 山 月
 駈落ミ洒落て途方に暮れて居る 清 春
 鹽落のうはさ一村だけでなく 秀 甫
 筋書を通り駈落逃けて行き 一 左
 駈落の歸に夜露が光り出し 南天棒
 駈落の意見は伯父の役になり 露 斗
 駈落にちみながすぎる晝の宿 通 助
 駈落ミ知らず自動車動き出し 竹 榮
 駈落の前までうさた籠の鳥 莢 豆
 駈落は掻き込むやうな飯ごなり 助 骨
 駈落に兄だけ理解持つて呉れ 新 坊
 駈落は風呂敷包を忘れたり 元 山
 駈落へあざけるやうな月がさね 佳 鳴
 駈落ミ知らずに巡査教へてる 蚊 十

(地)鰯賣り落つきも負て行き 琴 月
 (天)鰯賣り先つきの聲で引返し 凡 平
 (軸)鰯鰯浮世の風の吹かぬ村 洲 馬
 九十九早跳ねる鰯に砂がつき 同

橋本二柳子 岩崎 柳路 共 選

駈落が宿屋で汽笛近う聞き 聞 路
 駈落は道でびつたり伯父に逢ひ 叟 峰 仙
 駈落の身は人様の怖い事 辰 進 子
 駈落が内緒に寄越す家があり 一 閑 子
 駈落はすき髪ばかり氣にしてる 萬よし
 悲喜交々 駈落の夜の酒 同
 駈落の女の方は汽車に酔ひ のほろ
 駈落の女死んでも 歸らぬ氣 屏 呂
 駈落ミ見せず大阪驛に降り 凡 平
 駈落の女だん／＼氣が變り 同
 駈落は二階借でもする つもり 超 人
 駈落にまだ青春の血が匂ひ 同
 駈落はへんてつもなく戻つて來 乾 坤
 駈落ミきめた日から落付かず 同

(21) 淺 井 五 葉

(一)淺井林之助(二)五葉(三)無(四)大阪
 市港區市岡町七二の一九(五)取調中(是
 非御入用)あらば明治元年位ならんか)

(二)の項本社調査によれば明治十五年某
 月某日一白楊柳木なり(六)無(但川柳屋
)(七)一寸見當つかず(八)慨してよきも
 のは宜しからん(九)無(一〇)無(一一)有
 (一二)無(一三)明治卅九年頃ならんか。

(22) 蛭 子 省 二

(一)蛭子(エビス)省二、元來は石井姓であ
 りますが、頗付の御幣擔ぎ貧乏除けに
 ミ、一二年中に改めます(二)竹馬、「タ
 ケウマ」「チクバ」兩方で呼んで下さいま
 す、父の名篤を分けたのです。竹馬ミ言
 ふ川柳家が知つて居る丈けでも七人あり
 ますから敬意を表して此頃餘り用ひなく
 なりました(三)靜之屋、祖先から繼いで
 るます(四)朝鮮光州序に呱呱の聲は名古
 屋で上げ其地は學校の運動場になつてゐ
 ます本籍東京(五)亥、白髮殖え視力衰ふ
 耄碌しきつて居ますお察し下さい(六)無
 錢游興業——先日某新聞社に答へました

駈落は誰も彼もを不安がり吐露樓

駈落の夜行に搖れる膝ミ膝同

働いて食ふ食程に駈落考へず古城山

駈落へ神籤が悪く悪く出る同

駈落の眠に美しい須磨明石同

◇ 柳 路 選

隣部屋駈落らしいのが泊り山月

兄妹に見せて駈落宿につき青春

駈落に娘の方が誘ひ出し一左

駈落の髻に夜露が光つて無天棒

湯の町へ來ても駈落々着かず聞路

宿帳へ書くに二人の合す顔山美

駈落のだん／＼心細くなり一滴

駈落へ書留が着く母の金新坊

駈落に母の情が今日届き柳人

宿帳へ駈落一寸考へる佳鳴

ホットする迄駈落は逃げのびる盗泉

駈落ミ知らずに巡查教へてる蚊十

當分は駈落らしい氣で暮し濁水

駈落に銀行の金盗み出し炭車

駈落の相はませた女にて露斗

駈落の確か名古屋に居る噂屏三呂

駈落のチト永すぎる晝の宿遁助

駈落が湯の入る方へ向て發ち茨豆

駈落に此處から町の名が變り一閑子

駈落がかゝつた丈の非常線秀甫

新聞を買つて駈落落ちつかず超人

駈落をしたを小供は知つて居ず同

駈落ミ決めた其の夜は雨になり多葉子

駈落のきこかで髪を結替て竹葉

薄暗い方へ駈落顔を向け助骨

駈落をさへぎる様に雨が降り元山

駈落のもしやと思ふ機明き吐露樓

駈落の此處はいつやら來た所同

駈落のこんな所で友に合ひ万ふし

駈落の宿へ巡查は別な用のほる

駈落の更歸る顔も無く乾坤

駈落へ大大阪の砂埃り凡平

駈落の通に残る五十錢愚劣

スタンブを覗く駈落からの詫同

駈落の眼に美しい須磨明石古城山

駈落に女の派手が氣に掛り同

——大震災の落平民尙來一文の收入なし
尙は遊戲本位の道樂かぬけめ苦行です。

(七)「色男」はんで喉をしめるよう」は
んの一例(八)ジャンプの撰手で六尺豊かな
方がある由、お角力さんの嫁さんに三三
十貫程の方がある由斯の種の偉大な女を
好みます勿論本人ですよ自分は健康期に
六十七斤(九)一食つてゆく迄をお道樂ミ
言ふ」昔作つたのですが知足安分自ら慰
められてゐます(十)酒、篆刻、芝居、野
球、掃墓辭、手紙を出す事等いくらもあり
(十一)有、女房に川柳を作らせ得ない
のは罪吾になし(十二)喘息、ふぐ——女
ミ心中する奴もある此照山ミ腹食つて心
中せよと箸を俱にした人の話を聞いて佐
々木氏に會つた時直に心中する氣にはな
りました(十三)中學二年追憶すれば隨
分古い、明治三十九年頃早稻田時代久良
岐社で目鼻がつきかけた次第

(23) 吉川 啞 人

(一)吉川菊助(二)啞人(三)つぐを(四)大
阪市港區八條通二丁目十番地(五)明治二
十五年十二月三十日生(六)運輸監督(七)
湖へ竹の皮から鮮が落ち、路郎(八)肥々
た色の白い女(九)居候こんな心で國を出

(十客) 駈落の噂にバトの夜更。古城山

駈落に汚い男の意地を知り 同

駈落の夜行に揺れる膝と膝 吐露樓

駈落の後を振り向く月明り 愚劣

駈落を一層東京迄決め 凡平

駈落を急ぐ言葉は女より 多葉子

駈落へ夕陽大きく落る也 英豆

急 告

駈落の相手は確か丙午 遁助
駈落の恥かし様に富士を見る 屏三呂
駈落に女の方がいゝ度胸 乾坤
(軸) お家柄駈落したことも云々 柳路
駈落の女は林檎むいて呉れ 同
駈落も足坂もした云ふお職 同
震災後落を駈してそれつ切り 同
事務所にて 橋本二柳子

▲事務所新設 別記社告の通り今後一切の社務(編輯、購讀、廣告其他)を左記事務所を取扱ふことになりました。

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

▲主幹宛通信 主幹麻生路郎先生宛の御通信、ならびに至急を要する場合は従来通り阪神沿線鳴尾、川柳雜誌社へ願ひます。

▲青明忌 例年本社で営む青明忌は八月二日が祥月命日でありましたが、本年は本社の都合上八月十五日午後七時から故人最後の

永住地であつた神戸に於て開催いたします。会場は神戸市中山手通二丁目停留所北中二俱樂部兼海三句椿元紋太選會費廿錢

▲納涼川柳會 本社八月例會は柳友相互の親交を深めることと、夏の夜の大坂を味

ふために、八月九日(雨天の節は翌十日)納涼川柳會を開催いたします。詳細は追つて御案内致しますが、一大納涼船を會場として道

頓堀から大川筋に浮べる事になつてゐます。これ又盛んに御參會を歓迎いたします。兼題「花火」三句麻生路郎選。

か(一〇)映畫、將棋(一一)十三才頭に五人(一二)煙草と養た魚(一三)大正三年六月頃

(24) 橋本二柳子

(一)橋本與作(二)三柳子(三)柳の子(四)大阪市港區八條通二丁目一(五)明治廿五年九月廿五日生(六)大阪市電氣局運輸監督(七)「夕暮を空地に出ちが里心」路郎(八)「愛嬌あり中肉で心持ち脊の高い方で調和してゐる桃割姿(九)「石垣の冷むる時分に夜が更ける」(一〇)登山(一一)有三才になる女兒一人(一二)煙草酒、争ひ(一三)大正十二年二月十七日番傘句會へ出席しだのが初め。

(25) 二口句三味

(一)二口豐吉(二)三味三(三)雲明、晴嵐居士、寶園(四)石川縣羽昨郡鹿濱一〇九(五)明治廿九年八月廿日生(六)慶濱村收入役(七)餘り澤山ありて記されず(八)「ここでも女らしい女(九)自信のある句がた無いのを悲しみます(一〇)俳句 狸謠、團茶、活寫(二)妻はあるも愛の結晶はなし一人ほしいものなり(二)蛇、借金取、腹黒い奴(三)大正四年頃から真似をしてゐたが、大正九年八月からひこばね川柳社を創立し柳誌を發行した。

玩具箱から 省二生

(五) 猿の像

中口米吉先生の著書に、今日諸國に存在する三猿の像の中に、武蔵北足立郡吹上村の齋神は女陰を露はし、北埼玉郡下忍村字駒塚村大藏寺境内の一隅に存する、秀衝松といふ一株の松の傍に立てる石碑には三正の猿を刻み、其陰部を赤くぬりたり、同郡三ツ木には山王様さて此地方に有名な祠あり、賽錢箱の兩側に猿が女陰を顯して坐せる石像各二體を置く、信者は其側に賣る鐵丹を買ひて石像の陰部にふりかく。又其神體と等しき小形の石像を賣る、之を買ひて其祠に納めて祈願す十方庵の遊歴雜記に都鄙より捧ぐる繪馬は皆〇畫の如なる繪を畫いて奉納せり、されども今日にはさる事なし。此祠の猿も昔は庚申塚の猿なりしにはあらざるか

大和國北葛城郡當麻寺境内の庚申堂内の三體の猿の像、明かに陰部を露はして腰を掛く京都東山八咫塔の前なる猿申堂の猿が省男莖を露はしたるを見たることありしが今はなきが如し。又大阪太融寺庚申堂内の猿像は三軀共に女陰を露せり今日諸地方に行はる、風習中陰部を露出する猿の像を祀りし古俗より出たり、見べきものあり。和泉國堺市高須の或家の瓦に猿が左手に幣を持ち、右手に男莖を握したる狀を付したるものありしが、警察の發見する處となり取除きたり。勿論魔除の爲なるべし。西南戰爭にて有名なる肥後の田原坂の下なる木葉にては明治の頃までに木葉猿て不恰好なる土燒の猿が、大陰莖を抱へ居る狀を造りたるものを製出せり。子なき婦人は之れを求

めて神棚に祭り祈願せば子を得と言へり近來は子を懷きたる狀に作りかへて賣るミゴ尾張海東郡甚目寺觀音寺境内にオサルサマといふありて子なき女に子を授きて信仰するもの多し、其木彫たる木彫猿猴は高一尺内外の座像にして、半身大の桃實を抱きて正面に座す。猶此外に副像一軀あり。こは百年以前此猿の像を借りて夫婦のものが抱き合はる時は、忽ち子を授けること借らもの多かりしより造れるなり、大阪太融寺の猿の像も同一の目的にて貸借するに聞く甚目寺の猿の抱く、桃實は恐らく女陰を現はすものなるべし。之れを古川柳に觀る、鎌倉庚申堂の女猿があるのみ、關をなさい、鎌倉の女猿 (柳の葉末)

(六) 庚申

古川柳に庚申を詠むだものが非常に多い、それは庚申の夜には男女の交りをせぬ事、若し胎めば其子必ず盜賊となるこの傳

説に因つたのである。貞丈雜記に朱雀天皇大慶二年庚申御遊ありとある。榮華物語に藤氏御一門の庚申を守るを止められし事なごも現はれて居る程で、徳川時代には徹宵男女が密會して風俗を亂したものである。『太平廣記』『群談探餘』何れも同書で、人身有三尸蟲、謂之三彭、毎庚申月乘人睡以其過惡陳之上帝、故學道者遇是夕輒不睡と、『太上三尸巾經』に、人之生也、皆寄形於父母胞胎・飽味五穀精氣、是以人之腹中各有三尸九蟲、爲人大害、常以庚申之日上、上告天帝、以記人之造罪、分毫錄奏、欲絶人生籍、滅人祿命、令人速死、死後魂昇千天、魄入干地、帷戸遊走、名之日鬼、四時八節企其祭祀、祭祀既不精、即爲禍患、凡至庚申日兼夜不臥守之、道家の説から附會せられて庚申の事が興つたのは明かにて一書に天台の智證大師支那より庚申祭を傳ふとある。

元十二支十干の配當から出た事で世のい

たづら者がコネ上げた業には相違ない。精田彦尊が帝釋天の使者青面金剛の化身なりと稱せられたのは、一つは申の日に猿の通ひたる爲め他は青面金剛の秘法が骨蒸・伏連・傳尸・病氣を除くと言ふ事から、傳尸が庚申の三尸であるとして本地とされたのであらう。風俗佛事編輯に吾庚申本尊の前に目を塞ぎ口を塞ぎ耳を塞ぎ、三つの猿をおく事道書に見えず。青面の軌にも素よりなし。愚按するに之れ吾朝の好事の者庚申の像より思ひつきて孔子家語の三臧の故事をこつて、不言不聞不見の教を垂るものなりとある。要するに三尸が三申に混じつたものであらう庚申の文字又は猿の像が道祖神式に衝神として祀られたものが今は神體男根となつて下の病を癒やす信仰の的となり、全く生殖器神化してしまつた。

今日庚申ださうさいらぬ世話
庚申に宵からねるは世すて人
庚申を嫁の聞くのは目立つなり

庚申の夜の一人ねは地ものな
ねて用がないで庚申夜をふかし
庚申女房を口説き落すなり
有ふ事庚申の夜に瘡をしよひ

(七七)七の數

新世帶七庚申もするつもり

抑も青面金剛に七の數を用ふる事道家の説は更なる本朝にも慈鎮和尚の七猿の歌古書を探らば種あるべし、今庚申の日をあやまちで饅漿を含むきは七庚申つくるものなり、婦女のいひならはしたるも七の數なり。是を一度にてはたさむとするには七所の饅漿をもこむる事とぞ、なご用捨箱に出て居る庚申には七色菓子賣つたのもやは七の縁である。難波鑑曰天王寺の庚申は諸國の本寺なり、潤ある年は七庚申ありいはひ納めの庚申まうでよご群集して二十、燈ノこよばはる聲も喧しく七色の菓子々々賣聲もいそがはし、ある小さき箱に干菓子に砂糖大豆せんべい等いれ一錢で賣つたもの

川柳塔

高橋かほる

○ 水からくりキッスされたり振られたり
涼しさは葛まんじゅうの口當り
かたびらの甚平で親爺元氣よし
見てる間にだんど細工の鯛が出来
天瓜粉りゆうひの様な顔になり
怪談の役者の紋のややこしく
紫陽花は手まりの様に丸う咲き
天瓜粉今日は違つたこへつけ

林田馬行

○ 三越であれも芦屋の人を知る
膠物に差別をつける家を建て
運轉手菜種の國をまつしぐら
金遣ふ連れを歩いておもしろし
懐ろで又月給に觸つて見
母上を書いて濟まないなと思ひ
あこの揉め手に取るやうな葬を出し

洋装で男に負けぬ程儲け
女給になつて流れにさからはず
寺の静けさを母に吸はれ行く

○ 岩崎柳路

○ オブラート破れた云ふ眼つき也
救命器積んで水上のあわて様
ゲップして胃散よくきくなと思ひ
女車掌みんな小さい様に見へ
停留所云ひ間違つた車掌でれ
警察へ女將濕布の儘で来る
辯護士に聞く慰謝料され云ひ
要するに私生子丈けの始末也
老先生の下駄に焼印押してあり
引力の原理を孫に教えられ
バラックにアンテナ線の目立つ事
安宅へも旦那ラヂオを置く氣也
銀行の門で悪友待つて居り

○ 關本雅幽

螢火の大きく見せた水車小屋
洋服の案山子も立つてゐる世なり
あきらめる氣でもこんなに乳が張り

隅つこの一人平和を主張する

○ 井上 刀三

秀才の將棋へ白い指を見せ
失戀の氣儘みんなは淋しがり
金のない男それでも通つて居
頼母しく屑屋へ話す未亡人
生きて來た事に感心する日あり
冷淡な男判り切つてゐる事を言ひ
小金貯める事が理想になりにつ
空想の顔を見られて眼をつむり
苦しみに生れて來た氣がつかず
蒔いて來た金漫然と數へてみ
死金を逆へ暮の灯がさもり
何もかも言はふかしら嬉しさう
彼女の言ふ事親に語られず
嬉しさは男に金と地位があり
氣が弱いなき男の氣が變り
鳥打で出て行く宵の淋しさよ

○ 森田 輝 翠

俯向いて居れば好いのをストライキ
伯父が云ふ通りにすれば暇がなし

心根を直せと父は言つたきり
振り放す氣のやはらぐも戀仲だ
好い機會ばかりの様に株式屋
信切つて居たので腹が立つのです
女房に借りのある事まだ云はず
賣物にしては飾りがちと足りず

○ 徳田 双柳

待つて行くカメラは海の眞つ裸
陳列の様に竝んだ長屋の火
辯護士のほんまに腹を立てた様
打つて來い打つて來いといふ指南
あらましは勘定つけて入る飯屋
光榮に浴する頃に親はなし
銀行を出るに仲居は馴れたもの
失戀の見る文法も手につかず

○ 庄 萬 よし

冷たさは落ついて蛇見る女
悪人があつて救世軍榮に
團樂はクロスワードを解いて見る
その戀はハンカチ拾ふてやつた事
朝顔の花まで届くシヤボン玉

○ 西垣 松雨

直立の不動で松のみぎりが出
季節向家事科で習ふ御料理
蚊一つを打つに男性的な音
盛なりし事よ最後の別れなり
農村へ來て肩書を派手に持ち
早かつた手當を自慢らしく言ひ
慘害の跡を兎や角博と謂ひ
掌へのる丈け乘せて兒は貰ひ

○ 黒木 葵豆

末の子に團扇さられてゐる晝寢
鏡臺が尾羽うち枯らす年になり
ほつべんのやうに母親を案じ
しかも親友のこひづまこなり
やけざけののめるかるさに候はず
簿情なくせに割合よくしやべり
母よりも父の寢息の亂れ勝ち
晴れず曇らずなけきの眞珠かな
二階迄寢息揃はす水入らず
○ 塚崎 松郎
疊替え其日妾は家に居す

一枚の紙幣を崩して更けて行く

請負師病氣へ花を附けて去に
恪氣きころか健康を案じ
殺された夢から深くなつてゆき
嘘ばかり言ふ亭主とは思はざり
十年も勤めて戸棚一つなり
舟にでも乗つてゐる氣の膝枕
それもみな自業自得さ妻揚子
改まる言葉恪氣の一つなり
澁團扇書留が來てちこあはて

○ 麻生 霞乃

約束をあぶながられる程に呑み
お美事と言はれ苦るしい酒をのみ
又元の説にもきつた酒の酔ひ

○ 橋本 二柳子

救はれぬまだ救はれぬ釜ヶ崎
救はれる様に千日の坐りやう
四疊半やつぱり自分の家がよし
出る筈であつたさいふが今日の雨
澤山にないがミ隣の子へも分け



編輯後記

▲三伏さが盛夏さかいふ文字を使ふのでさへわづらはしい此暑さにも屈せず、著々として八月號の編輯を終つたことを諸君と共によろこびたい。暑中の御り遙に諸君の健康を祈つて居ります。

▲去月七日から十一日まで、三越で昨編路展覽會を開催された俳人中野三允氏はまた、川柳の研究家として、知名の人であります本社と同氏大阪滞在を機として七月八日、主幹三柳子氏とが野田屋と廣田屋で同氏と小宴を催されました。其歸途萬よし店へ立寄られたところ、偶然私も來合はせてゐたので話は入いにはづみました。越へて七月十二日夜、別項の如く同氏の歡迎會を開催いたしました

當夜は雨天にかゝはらず多數熱心な參會者があつたので大變愉快でした。最近同氏から、參會の皆さんへよろしくこのお便りがありました。

▲同人太田一聲氏は池澤樂居氏と共に中旬に淡路の洲本にあそばれたさうです。句に曰く「じつと見た紀淡海峡眞帆片帆」地の色も木の色も違ふ淡路島」

▲本誌寄稿家武笠山椒氏は御病氣であつたさうです。それがため「本事川柳」の續稿も遅れましたが、最早病氣も全快したので近く筆を執りますこのお願ひがありました。

▲坂井久良岐氏の百扇會が百萬石雜誌社主權の下に金澤市大丸支店にて廿五、六七の三日間大々的に展覧されるさうです盛會ならんことを祈ります。

▲同人駒井美の作氏は、去る六月一日長男を擧げられました。御目出度い極みです。

▲同人高見柳骨氏は、引續き廣島電信隊に無事勤務されてゐます。最近同氏から本社へお便りがありました。

▲函館川柳社の同人として、永らく「忍路」の編輯に従事されてゐた本社同人地井花童子氏は、今回家事の都合上、函館川柳社を退社されたこの御通知がありました。

▲新進作家として最も作句に熱心な河南

放馬氏は本社同人として入社されました。

▲平井光太樓氏は今回、病氣のために同人を退かれました。御全快の程を切に祈ります。

▲桶瀬日年氏は最近東京市牛込區肴町三十七番地へ轉居されました。

▲小寺鳩甫氏は大阪府池田町七八九番地へ轉居されました。

▲大正六七年頃に奮つてゐられた新聲劇の大森淳二事大森不次氏は最近同劇の幹部に晉進されました。

▲大連川柳家、壽明、西嫁、三福、四馬外數氏より寄せ書を頂きました。

▲本紙三月號十四頁中

細帶の先生教室を遅れて出 飯山の先生は足の誤り。四月號十二頁中

歸農した譯を役場の人は知り 飯山は飯山氏でない旨御通知がありました。同句の作者は御通知願ひます。七月號十二頁中

聾が來て商店の位置ちと變り 飯山の商店は商品の誤り。同上、黃昏にもうクレイプは乾いてゐる、の下同さあるは飯山。同上

黃昏の夜に杓子の威勢よし 文久の夜は庭の各誤りでした。

▲京都で發行されてゐた擬寶珠は今度版

刊されました。(松郎生)

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するこゝ。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこゝ。

募集

第二卷第十號課題

八月十五日締切
(各題二十句以内)

- ▼祭 淺井五葉選
- ▼立膝 安川久流美選
- ▼夏服 關本雅幽共選
太田一聲

第二卷第十一號課題

九月十五日締切
(各題二十句以内)

- ▼卵 前田雀郎選
- ▼石屋 高橋古城山選
- ▼舊家 林田馬行共選
矢田右大臣

每號募集

- ▼近作柳傳(五十句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

今後社務一切(編輯、購讀、廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

- 一部 參拾錢(郵)
- 六部 壹圓六拾錢(稅)
- 十二部 參圓(共稅)

料告廣

本誌の廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼詩代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年七月廿五日印刷
大正十四年八月一日發行
(第二卷第八號 毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 麻生幸二郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

- 書店捌賣
- (大阪) 明文堂 公立社 柳屋
 - (東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
 - (金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

暑中御見舞

福 島 乾 坤

大阪市北區玉江町二ノ二六

暑中御見舞

高 橋 か ほ る

大阪市南區北炭屋町二〇三
電話 南 五 九 六

暑中御見舞

大 塚 可 兒 人

大阪市東淀川區本庄町七六

暑中御見舞

河 南 放 馬

大阪市此花區上福島郵便局
電話 土 五 七 二 〇

暑中御見舞

西 村 山 月

大阪市港區八幡町二四八

暑中御見舞

若 林 吐 露 樓

神戸市宮本通四丁目
六七ノ四 近 藤 方

暑中御見舞

吉 川 啞 人

大阪市港區八條通二丁目北小路八

暑中御見舞

新 島 新 坊

福島縣平町長橋町六六

暑中御見舞

松 本 助 六

大阪市住吉區梅ヶ枝町五丁目

暑中御見舞

山 川 二 葉 亭

西宮市東町三丁目

暑中御見舞

久 世 一 路

大阪市港區北福崎西ノ町四
電話 西 八 二 八

暑中御見舞

竹 田 蘆 穂

大阪市港區八條通二丁目南小路

暑 中 御 見 舞

竹 徳 井 徳 太

内 多 聞

大阪市住吉區濱口町三三六

田 双 柳

大阪市住吉區安立町二三二

伊 あ つ し

南海線天下茶屋驛前

田 太 閣

大阪市住吉區安立町二三二

田 一 聲

岸和田市下野町四一九

暑中御伺

今井卯木

横濱市西戸部町
山王山六五六

暑中御伺

岩崎柳路

東京市芝區愛宕町
一丁目十六番地大成社内

暑中御伺

池澤原治郎

大阪市天王寺區石ヶ辻町一二一

暑中御伺

辻左馬

和歌山縣田邊榮町

今度左記の所へ轉住在阪中ノ御厚誼を謝す

暑中御伺

三好世間亭

廣島縣安藝郡坂村

暑 中 御 見 舞

安 井 八 翠 坊

廣島市鐵砲町泉邸前

暑 中 御 見 舞

万よし漫筆帖拔萃（イロ順）

万よしで呑んでる脊の人通り
道哲生まる万よしの暖廉より
万よしの皮肉へ握手して歸り
万よしで電車のあらん限りのみ
万よしで南へ廻る連れが出来
立飲みさ椅子へ万よし如才なし
万よしはくだけた人の来るさころ
貰はれて来て万よしの辻を折れ
万よしののれんに嬉しそうなかほ
忙はしかつたので呑み暇で呑直し

馬 行 蓬 吟 刀 三 路 郎 溪 花 坊 義 矢 満 夢 路 松 邸 水 府 万 一

川柳家各位のお出でを、冷めたビールに
自慢の豆腐ミ野性の親爺が待つてゐます

道頼堀新戎橋

萬 よ し

庄 健 一

敬 白

暑 中 御 見 舞

塚

崎

松

郎

大阪市北區佐藤町一八

井

上

刀

三

大阪市北區絹笠町大江ビルヂング三〇

林

田

馬

行

大阪市外豊中榮通二丁目石賀方

橋

本

二

柳

子

大阪市港區八條通二丁目十一番地

暑 中 御 見 舞

駒 井 美 の 作

大阪市東區御差町二二一

西 垣 松 雨

大阪市東淀川區南濱町一八二

森 田 輝 翠

大阪市住吉區天王寺町下の森三五〇

關 本 雅 幽

大阪市港區鶴町四丁目十三號

麻 生 路 郎

兵庫縣武庫郡鳴尾

暑
中
御
伺

溪花坊編輯川柳の雜誌

「大大阪」毎月一日發行菊半截四
十頁前後△表紙服部亮英畫伯△諸
家の近作△研究文滿載（部金十五錢）

大阪市北區老松町

大大阪川柳社

電話北二四〇五八番
振阪四三〇九番

暑 中 御 見 舞

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術
印刷百般

藤 本 兄 弟 社

大阪東區農人橋二丁目
電話東一七〇番・七七〇番

▲道頓堀川にかゝつた日本橋を南へ渡つて牛丁も
行かないところにある古本屋です。

▲主人公藤室氏は愉快なおちさんです。さても古
本屋のおちさんとしては珍らしい人です。

▲古本を漁りながらいろいろな話をしておれば道頓
堀を歩いて來た感じが流れるやうに出て來ます。

讀賣新聞より

「大阪の川柳雜譚」十月號の廣告面に土地
一流の古本屋公立社の一頁廣告がのつて
ゐる△その廣告文さいふのが關西川柳界
の大家麻生路郎クンの執筆でその一節に
――「主人公は本の蟲の心持をよく知つた
人です」と△「本の蟲」が面白い、古本に
たかる蟲けらの心持さいふのはマアどん
なものだすやろ、ひやかし客を紙魚扱ひ
も振つてまんな

▲この特色としては、どんな本でも蒐めてある
こと、値段のところはまかしておいても安心して
買へるさ云ふこと買ふさか買はぬさか云ふことを
問題にせず愉快に本を見られるさいふことです。
▲せいぜい主人公お馴染みになつて下さい。探
して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出
來るだけ便宜を與へて貰へます。(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

岩崎柳路	井上刀三
原史風	林田馬行
橋本二柳子	二木幸堂
西垣松雨	徳田双柳
太田徹底郎	太田一聲
河南放馬	龜井花童子
高橋かほる	高橋古城山
高見柳骨（入管中）	竹内多聞
塚崎松郎	黒木莢豆
矢田右大臣	柳川洲馬
駒井美の作	麻生葭乃
佐々木黙闇	宮内一洲
庄萬よし	森田輝翠
關本雅幽	

第一支部	大阪市南區新戎橋南詰 幹事 庄萬よし
第二支部	大阪市北區南同心町二丁目四五〇 幹事 原史風
第三支部	岸和田市下野町四一九 幹事 太田一聲
第四支部	大阪市港區鶴町四丁目十三號地嵐山方 幹事 關本雅幽
第五支部	大阪市東區飢差町二二一番地 幹事 駒井美の作
第六支部	兵庫縣武庫郡六甲苦樂園 幹事 佐々木黙闇
第七支部	大阪市東淀川區南濱町一八二 幹事 西垣松雨
第八支部	神戸市上中島町二丁目四二 幹事 宮内一洲
第九支部	山口縣山口町石原小路 幹事 柳川洲馬
第十支部	大阪市外豐中榮通二丁目石賀方 幹事 林田馬行
第十一支部	東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内 幹事 岩崎柳路
第十二支部	國館市青柳町五〇 幹事 龜井花童子
第十三支部	大阪市住吉區安立町五丁目二二 幹事 徳田双柳
第十四支部	朝鮮仁川仲町二丁目八 幹事 矢田右大臣

糖尿病新藥

インスマリチン Insmellitin

本劑

は本研究所創製にかゝる二種の獨立特効藥（各種糖尿病に對し）パホミン「肝臟抽出物」ミヤタロン「五加科植物抽出物」を主藥とする錠劑なり

特色

パホミンは簡單なる徑口的攝取により安全に血糖及尿糖を容易に〇、二以下に降下せしめ得、ヤタロンは器質的病變に及ぼす根本的恢復整調作用を司る

今日の生活に拘束を加へず、副作用絶無

適應症

各種糖尿病、腎臟病兼糖尿病、結核兼糖尿病、糖尿病に起因する口渴、饑餓感、瘰癧、癆、常習便秘、不眠症

包裝

インスマリチン錠 九〇錠入 一三圓十五日分 一八〇錠入 二五圓（廿日分）

醫科專用

Pahomin + Yatalon = Insmellitin

Pahominpul. 25gr. 50gr. } の御注文は發賣元へ乞ふ
Yatalonpul. 50gr. 10gr. }

發賣元

大阪市東區仁右衛門町二八八

製藥所

大阪市東區仁右衛門町二八八

（概説實驗及抄録進呈）

一 特約店

東京 銀座
大阪 長堀橋
名古屋 中區

熊谷英商店

電話東三五一四 振替大阪七一〇一三

熊谷腎臟病研究所

松屋吳服店新藥部
高嶋屋吳服店新藥部
松坂屋新藥部